

拝啓 時下益々ご清祥のこととお喜び申し上げます。

2010年11月18日(木)より11月21日(日)までの4日間、美術作家・小沢敦志は、荻窪のギャラリー六次元におきまして、個展「ゼロ百景」を開催する運びとなりました。

私は武蔵野美術大学、工芸工業デザイン科にて金属工芸を専攻し、鉄を主体とした道具のデザイン、制作技法を学んできました。2003年に同大学を卒業、同年に立川市にアトリエを開設し、当初はロートアイアンによる、内装、外装の金物制作を行っておりました。

1000℃を越える火力によって鉄は有機的な側面を垣間見せ、ハンマーで打ち据える度に、それは血の通ったものとなります。こういった手作業を重ねていくうちに、興味の対象は、機能やデザインではなく素材そのものの純粋な美しさの探求となり、「鉄とは、一体何者なのだろうか？」という自問自答が始まりました。

そこで、自身が続けてきた道具作りを一から見直してみると、「板を曲げ、脚をつけたら椅子になる。棒を曲げ、堅牢に組み上げたらフェンスになる。…つまり、素材に機能や構造を与える事で道具が成立する。」

というプロセスが見出されました。

同時に、このプロセスを逆転させることで、或る仮定が産まれることとなります。

「道具から機能や構造を取り除くと、そこには純粋な素材のみが残るのではないだろうか？」すなわち足し算ではなく、引き算による制作です。

自身が行ってきた、「鉄を炎で熱し、金槌で叩く」という行為は、意図的に形を作ろうとすれば足し算となり、無意識に単純に叩き続ければ引き算となります。後者の作業を身の回りの鉄製品に対して行った結果、そこには今まで見た事の無い物質が存在していました。

例えば同じ10個の空き缶を、同じように真上から叩いていった場合、いずれは全てぺらぺらに潰れてしましますが、その輪郭やシワのより具合は、一つとして同じ物が在りません。この現象を私は「素材の中にある固有の意思」と捉え、そこにどのような美しさがあるのかを研究し、発表し続けております。

2009年に参加した越後妻有アートトリエンナーレでは、叩く鉄製品は全て地元の農家の方々から頂き、廃校でインスタレーションを展開致しました。2010年に恒久設置となった立川市新市庁舎の屋外モニュメントでは、制作プロセスにワークショップを盛り込み、多くの人の手を経た彫刻作品となりました。いずれも、地域の営み、人間の記憶を素材に宿すというテーマがあります。

そしてこの度開催する個展「ゼロ百景」では、鉄製品を叩く行為を続けるうえで、相對するふたつの事柄の接点を求めます。例えば人工物と自然物、具象と抽象、意識と無意識…。これらは、どちらか一方が「在るべき姿」、もう一方が「淘汰されるべきもの」などと、強引に決めつけてしまう事は出来ないものです。そこで、ふたつの接点を、「プラスでも、マイナスでもないゼロ地点」と解釈し、唯一の単純美を探り求める展示会となっております。つきましては本状をご覧の上、ご高覧賜りますようお願い申し上げます。

敬具

2010年11月 小沢敦志

小沢敦志展 ゼロ百景

2010年11月18日(木)
～

11月21日(日)

ギャラリー + 古本 + カフェ = 6次元

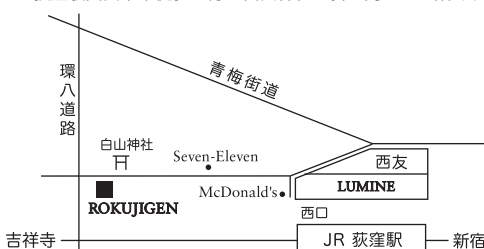
ROKUJIGEN

木・金・土・日 15:00→22:00

月・火・水 定休日

167-0043 東京都杉並区上荻 1-10-3-2F
03-3393-3539 www.6jigen.com

JR荻窪駅西口下車徒歩3分 白山神社の斜め向かい2階です



※作家在廊日時は、右記ウェブサイトに記載致します。 <http://oza.jounin.jp>